

[原著論文：査読付]

日本語聴解における短文の大意理解
—N1聴解の「概要理解」問題を中心に—

夏 俊¹⁾，松田 高史²⁾，沙 秀程³⁾

Understanding the main idea of passages in Japanese Listening
— Centering on the Synoptic Understanding of N1 Listening

Jun XIA¹⁾，Takafumi MATSUDA²⁾，Xiucheng SHA³⁾

Abstract

Understanding the main ideas of passages in Japanese Listening is difficult and abstract for learners. This paper centers on the Synoptic Understanding of N1 Listening, and presents relevant advices from four aspects including ‘interpreting the structure and the topic sentence of a passage’, ‘predicting’, ‘speculating’.

KEY WORDS : passages; main idea; structure and the topic sentence; predicting; speculating

1) 長沙学院日本語学科
2) 九州共立大学名誉教授
3) 九州共立大学共通教育センター

1) Foreign Langue Department of Changsha College
2) Kyushu Kyoritsu University, Professor emeritus
3) Kyushu Kyoritsu University, Career and General Education

はじめに

ニュース、会議での発言、講座などの聞き取りは日本語による社会生活において不可欠だが、音だけで一定の長さのある発話の大意を掴むことは、日本語学習者にとって難しいことである。日本語聴解の授業でも、「どこが要点か判断できない」「未知語や聞き漏らしに拘って、後続内容を聞き損なってしまった」という声が、多くの学習者からあがる。本稿ではそうした声を背景に、N1聴解部分の「概要理解」問題を中心に短文大意の把握方法について検討する。

N1聴解試験の「概要理解」問題では、質問や選択肢などの視覚的情報がまったくない状況で、日常生活、学校生活、職場などの幅広い分野について、長さ1分程度(200-300字)の発話内容を6題、1分間約250字のスピードで1回聞くだけで、主旨が掴めるかどうか問われる。2010年7月から2016年7月までの合計13回のN1聴解の「概要理解」問題は、12の「対話」と64の「独話」からなっている。そのうち本稿では、短文の大意理解を主眼とすることから、「独話」式聴解に実例の対象を絞ることにする。

『新しい「日本語能力試験」ガイドブック』によると、N1聴解の認定の目安は「幅広い場面において自然なスピードの、まとまりのある会話やニュース、講義を聞いて、話の流れや内容、登場人物の関係や内容の論理構成などを詳細に理解したり、要旨を把握したりすることができる」ことで、「概要理解」問題の狙いは「まとまりのあるテキストを聞いて、内容が理解できるかどうかを問う(テキスト全体から話者の意図や主張などを理解できるかどうかを問う)」こととなっている。

「概要理解」の問題形式を例(1)で見よう。

例(1) 大学で先生がある国について話しています。

M: この国は、今、経済の転換期を迎えています。この国の経済を支えているのは、地下に埋蔵されている豊富な天然資源です。しかし、埋蔵されている資源には限りがあります。また、このまま資源の輸出だけに依存していると、資源価格の変動によって、経済情勢が大きく左右されてしまいます。そこで政府は、資源の輸出で得られた豊富な外貨をもとに、新しい産業を育成する計画を立てています。

質問: 先生はこの国の何について話していますか。

選択肢: 1 今後の経済政策 2 資源価格の変動
3 地下資源の埋蔵量 4 資源の輸出促進

(2011年7月N1聴解問題3問^①)

例(1)のテキスト、質問および選択肢はすべて音声

のみである。問題を解くには語彙、文型・文法、背景知識に加えて、リアルタイムで行うロジック的推測や判断、まとめなどの能力が必要になる。つまり、言語知識と非言語知識をともにフル動員することが求められるのである。この点について横山(2008)は、「聴解とは、言語知識を活用し、また文脈・場面や背景知識を手がかりにして、音声から意味を構築する過程である」とし、「聴解指導は「理解できない」ものを含んだテキストをストラテジーを用いながら理解する方法を練習させることだ」と述べている。また、水田(1996)はこの「ストラテジー」を、「新しい情報を学習したり保持したり、あいまいな情報を理解するために活性化された心理過程」と定義している。

本稿では、日本語聴解における短文の大意理解を「文章構造と主題文の把握」、「予測」、「推測」の三つのストラテジーから論じてみたいと思う。

1. 文章構造と主題文を把握するストラテジー

聞き取りで大意を問う短文は、「事柄や原因の説明」「意見・主張の表明」「経緯の説明」などの目的を持ち、「冒頭」「展開」「結尾」などの要素から構成されるが、その構造は読解文と大きく異なるものではない。そこで本節では、現場での「どこが要点であるか判断できない」という学習者の戸惑いの解消法として、文章構造と主題文を把握するストラテジーを検討する。

2010年7月-2016年7月のN1聴解「概要理解」の独話聞き取り問題の分析からは、以下のような結果が得られる。

- (1) 「概要理解」の独話聞き取りのほとんどがある目的をめぐって展開する論説か説明で、基本的に「序論—本論—結論」の構造になっている。
- (2) 「序論」に「背景・現状・一般論」、「本論」に「説明、解釈、具体例、補足」、「結論」に「主張、意見、まとめ」などの構成要素がある。
- (3) 「序論—本論—結論」のつながり方は、大きく「順接」「逆接」「添加」「並列」に整理することができる^②。

大意理解のためには「主題文」の把握が重要となる。佐久間(2000)は、文章全体を統括する「主題文」^③の出現位置と頻度によって、「文章型」を「頭括型」「中括型」「両括型」「尾括型」「分括型」「潜括型」の6種に分類している。つまり「文頭にある」「文中に集中する」「首尾にある」「文尾にある」「文中に分散する」「文章の背後に潜在する」という主題文の位置によって文章型を分類しているのである。

「短文のどの部分に重点を置くべきか分からない」という課題への答えとして、筆者は「主題文」と「サポート部分」の2つの面からの把握ということを考えているが、可視性のある読解文と異なり、過ぎ去った内容は瞬時に消え、先の内容もその瞬間でしか見えない音声問題において、いかに「主題文」を予知して、判断するか。以下では「主題文」の検出方法を、文章構造と主題文の位置関係から具体的に考える。

1.1 主題文の位置と文章構造の照らし合わせ

表1は、2010年7月-2016年7月のN1聴解「概要理解」の独話聞き取り問題の発話内容について主題文を洗い出し、佐久間(2000)の分類にしたがって主題文の位置と文章構造および内容構成を照らし合わせたものである。

表1 N1 聴解「概要理解」主題文の位置、文章構造、内容構成例の対照

	主題文の位置	構造	内容の構成例
1	頭括	順接	主題文—例—補足
2	中括	逆接・順接	背景・導入・現状・一般論—(逆接・移行)—主題文—補足・説明・解釈・例
3	尾括	順接・逆接	背景・一般論・現状・導入—逆接・移行・理由—主題文
4	両括	順接	主題文—理由・背景・例—主題文
5	分括	並列・添加・逆接	理由—主題文, 理由—主題文
6	潜括	並列・添加・順接	背景・現状・導入—時間通りの展開・並列する原因や現象

注:「・」は「或いは」を意味し、「—」は「次の段階へ」と意味する。

もちろん、実際の聞き取り時に「文章構造はどうなっているか」「文脈はどうだ」と考える余地はないが、文章構造のあり方ある程度理解できていたら、主題文を見つけ出すヒントも得られるのではないかと思う。

発話の主旨・観点の統括的な提示部分である主題文の位置や言語的特徴は、読解文の場合と共通する。出題の多くを占める論説文であれば、「序論—本論—結論」という基本的パターンからして、主題文の多くは発話の最後にくるであろう。また文の流れが「逆接」であれば、「背景—逆接・過渡—主題文」となることから主題文は文中にあり、逆接の語句の後ろにくるこ

とが普通である。並列構造の場合は、文中に主題文が散在する可能性がある。

以下ではこうした「主題文」の位置的特徴と言語的特徴について、少し詳しくみていく。

1.2 主題文の特徴

(1) 主題文の位置的特徴

佐久間(2000)の文章型6分類に従い、2010年7月から2016年7月までのN1聴解独話問題64例の主題文の位置を集計して表2を作成した。

表2 N1 聴解「概要理解」における主題文の位置

主題文の位置	頭括	尾括	両括	中括	分括	潜括
数	7	14	10	21	3	9

注:主題文は正解である選択肢と照らし合わせながら筆者が判定した。

表2からは、「中括」、つまり「文中に集中する」主題文が一番多く、全体の約1/3を占めていることがわかる。この「中括式」発話内容の傾向については、以下の4点が指摘できよう。

① 「中括」では逆接構造が多い。すなわち、「しかし」などの逆接を表す接続詞、「・・・しかし・・・そこで・・・」という逆接と因果の構造の後に主

題文が現れる。また、「実は」のような態度を一転する表現の直後にも、新情報や主張などを表す重要な文の来ることが多い。

② 主題文の後に具体例、原因説明、解釈、補足などで主題文をサポートすることが多い。

③ 過渡文の直後に主題文が現れることがある。

④ 「中でも」のような目立つことを言う表現は主題

文とのつながりが深いので、後につく内容に注意すべきだ。

「中括」に次いで集計数の多い「尾括」であるが、「序論—本論—結論」が論説文などの基本構造なので、最後に主題文で締めくくることが多いことは頷ける。一方、冒頭で主旨を明かしてから例、説明、解釈などで主旨をサポートし、最後に再び主題文で全文を締めくくって印象を強める「両括」も、論説文などではよくあるパターンである。表2では「尾括」と「両括」を合わせると全体の37.5%になる。したがって、「両括」にしる「尾括」にしる、耳に残りやすい最後の部分をしっかりと掴むことで、発話の大意理解が得られる可能性は大である。

主題文が文中に分散している「分括式」は、「概要理解」問題では「並列」「逆接」「添加」の構成になっている。「主題文」が存在しない「潜括」は、「並列」「添加」「順接」構成になっている。また、物語のように時間通りに展開する文の場合も「潜括」になる可能性が高い。

「潜括」では聞いた内容を振り返ってまとめる能力が一層要求されるが、「並列、順序、添加」などを表す接続詞、繰り返して現れるキーワード、類義語、反義語などをヒントにして、内容を理解することはできるであろう。また、具体例や説明・解説、補充などの「サポート部分」からも文意をつかむことは可能である。大意理解において、「サポート部分」は「主題文」に次ぐ重要な部分である。

(2) 主題文の言語的特徴

主題文は普通、主張・観点の表明、感情の表現、文のまとめ、判断提示を内容とする。したがって、主題文は一般に特定の接続詞、文末表現、動詞などの標識を帯びている。その標識用語や表現を分類すると以下のとおりである。

- ① 因果関係を表す接続詞「なので、したがって、そこで、それで」、比較を表す接続詞「むしろ、それよりも」など。あるいは、まとめや換言を表す接続詞「言い換えれば、つまり、要するに、すなわち」、逆接を表す接続詞「しかし、ただ、でも、だが」など。
- ② 態度などのモダリティーを表す文末表現「のではないか、ことであろう、だろうか、べきだ、と言わざるを得ない、にほかならない、にすぎない、ねばならない、は否定できない、見直す必要がある」など。

③ 要望を表す表現「必要がある、ほしい、望ましい、期待する」など。

④ 「見直す、期待する、望ましい、求められる」などの動詞は発話者の態度と願望を表し、注意を怠ってはいけない表現である。

上記の標識が使われた例をN1聴解問題で具体的に見てみよう。

例(2) むしろ価格を抑えて、ほかの会社の店舗との差別化を図るべきだと思います。

(2011年7月N1聴解問題三問6)

例(3) 今後、この「緑マネー」が普及し、お客が増えることを地元では期待しています。

(2014年7月N1聴解問題三問6)

例(4) しかし、農家は後継者不足で高齢化が進み、この傾斜地での作業は負担が大きいので、雑草が伸びたまま手入れされない畑も多く見られました。そこで桜町では、近くの無人島のヤギを連れてきて畑に放牧し、雑草を除去することにしました。

(2015年12月N1聴解問題三問5)

例(5) 企業や労働者が置かれているこうした現状をしっかりと見直す時期に来ているのではないのでしょうか。

(2015年7月N1聴解問題三問5)

これらの例は、前述のように、「・・・しかし・・・そこで」という共起構造で主題文を導き出し、「思う、期待する、ではないか」などで文をしめくくっている。また、例には挙げていないが、「実は」のような態度を一転する言葉、「中でも」のような特に目立つことを言う言葉もキーセンテンスを導く用語としてよく用いられている。とはいえ、言語的標識を伴わない主題文もあるので、やはり文脈をよく捉えて判断することが必要であろう。

1.3 アンケート調査

本節で紹介した「文章構造と主題文を把握するストラテジー」の有用性を測るために、長沙学院日本語学科4年生3クラス27人を対象に調査を行った。調査はクラス単位で行い、2010年7月から2016年7月までのN1概要理解問題から1回分の内容を年月別にランダムに抽出して実施した。まずは1回目として抽出した独話を聞いて答えを選択してもらい、その誤答率を測った。次に、本節で論じた「文章構造と主題文を把握するストラテジー」を説明した後に、1回目とは内容が異なる独話で2回目の調査を行った。その結果を

以下の表3に示す。

表3 主題文把握ストラテジーの有用性を測る
アンケート調査の結果

クラス	調査	問題内容	誤答率
1班 (5人)	1回目	2015年12月	57.78%
	2回目	2014年7月	47.23%
2班 (11人)	1回目	2015年12月	56.36%
	2回目	2014年12月	46.96%
3班 (11人)	1回目	2015年7月	69%
	2回目	2013年12月	60%

結果として、2回目の誤答率は1回目と比べて平均9.65%下がった。聴解に影響する要素は語彙、文型・文法、背景知識など様々であり、文章構造・主題文の特徴を強調しただけで、誤答率が10%近く下がったことは、文章構造と主題文を把握することの重要性を物語っている。

2. 予測のストラテジー

文章構造と主題文を把握するストラテジーとあわせて、独話の大意把握に有用なものとして「予測」が考えられる。蒔田(2014)によると、「予測」は理解を促進させたり発展させたりするために、テーマや既有知識など聴解前の情報や、聞いているときの文脈や話し手の音声的特徴から、後続するテキストや話し手の意図を予測する「円滑化」のストラテジーである。

本節では、この「予測」を「発話者の社会的身分」を手がかりに、発話の表現意図を把握するストラテジーとして考察する。

「概要理解」独話問題の発話者は、学校生活や日常生活の場面にに基づき、基本的にアナウンサー、コーディネーター、大学の先生、専門家、店員などに分けられる。そして発言内容は、その社会的身分にふさわしい話題であることが普通である。たとえば、アナウンサーは社会現象の報道、コーディネーターはある事柄についての評価・評論、大学の先生は現象紹介・問題提起、専門家はある現象や問題の現状・原因・解決について語る人が多い。事例を見てみよう。

例(6)：テレビでアナウンサーが話しています。

男：この十年、海外に留学する日本人学生が減少しています……

(2015年12月N1聴解問題2問)

例(6)の発話者はアナウンサーで、話題は「日本人

留学生人数の減少」である。アナウンサーの社会的役割は評価や助言ではなく状況報道であるので、後続内容は（海外留学する日本人学生が減少している原因）のことだろうと予測できる。

次に、「発話者の社会身分+文脈」を用いた予測過程を見てみよう。たとえば、発話者がコメンテーターである場合、その社会的役割は、問題となっている事柄について専門的立場から批評や解説をすることである。そうしたコメンテーターが国立公園という大型公園について発言するならば、どのような内容がまず予測できるか、続く発話の文脈でその予測をどのように修正したり、絞ったりするかを図1に表した。

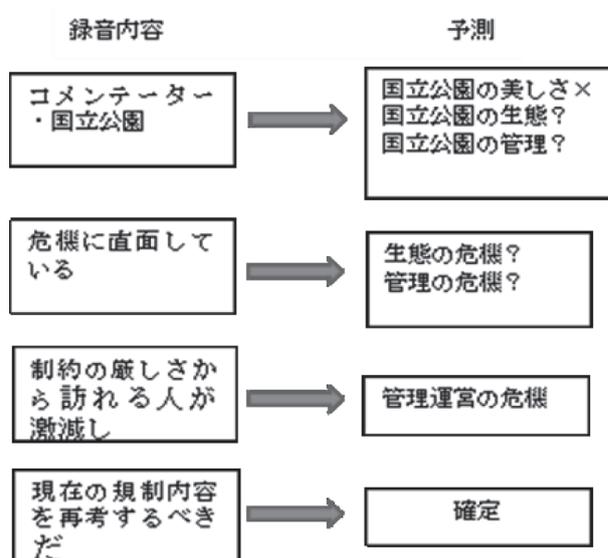


図1 コメンテーターの発話内容推測例

図1の場合、聴取者が「国立公園」という言葉を聞いた瞬間に発話の内容が「公園の美しさ」か「公園の管理」、あるいは「公園の生態」のことかなと身構えるが、発話者がコメンテーターであることから、「公園の美しさ」になることはない判断できよう。ついで「危機に直面」という発話から話題は「生態の危機」か「管理の危機」かと考える。そして、「制約の厳しさ」「訪問者の減少」と続くので「管理」の問題だと予測し、「規制内容の再考」の発話で内容を確定する。しかし、この一連の予測過程は、話を聞く側の「国立公園」についての背景知識や既有知識に左右される。次節の「推測ストラテジー」の項でも述べるが、背景知識や既知知識は、流れる時間の中で文意を探る際の負担を減らす意味あいにおいて、「予測のストラテジー」でも重要な要素になるであろう。

なお、予測のストラテジー考察に際して、N1 聴解「概要理解」問題64例を場面別に仕分けて、発話者、分野、談話内容を指標として作成した表を稿末に掲げた。発話者の社会的身分と発話内容の連関を確認していただければと思う。

3. 推測のストラテジー

聴解での聞き漏らしや、未知語に拘り過ぎて後続内容を聞き損なってしまうことは、よくある。こうした聞き漏らしや未知語などを補完する方法として有効なのは、「推測」であろう。蒔田(2014)は、「推測」を聞き取りの途中で問題が生じた際にそれを補完する「問題処理」のストラテジーとしている。

本節では、この推測ストラテジーを用いて、文脈と背景知識を手がかりに語彙および文を推測する方法を具体的に考察する。

3.1 語彙の推測

(1) 文脈による語彙の推測

未知語や聞き漏らした言葉は、その前後の文脈にある定義、解説、具体例によって推測することが可能である。

例(7) このような状況の中、緑町商店街ではユニークな試みを始めました。今月から緑町商店街が緑マネーというこの町の商店でだけ使えるお金の制度を作りました。

(2012年12月問題3問1)

例(8)・・・中でも、特に増加率が高いものは小さい子供、特に幼児にかける教育費です。これは小さい子供に習い事をさせる家庭が増えていることが背景にあるようです。習い事の中でも特に人気なのは水泳、英語、音楽などで、月々払う月謝も増加傾向にあります。

(2014年7月問題3問4)

上記の例(7)では、たとえ「マネー」というカタカナ語をすぐ識別できなくても、その後の解説で出てくる「お金」という同義語でその意味が推測できる。例(8)の「習い事」の意味も、その後の具体例「水泳、英語、音楽など」の語から推測できるだろう。

(2) 背景知識による語彙の推測

例(9) 緑ある公園は子供の健全な遊び場、市民の憩いの場として必要不可欠です。

(2012年12月問題3問2)

例(10) 日本は四方を海に囲まれていることから・・・

(2014年7月問題3問5)

例(11) 観客がかたずを飲んで見守るような場面でも動じることなく本来の力が発揮できる内面の強さ、試合で良い結果を出すにはこの点に特化したトレーニングが不可欠です。

(2016年7月問題3問2)

例(9)の場合、「憩い」という言葉に馴染みがなくても、続く「子供」「市民」の語から公園の役割の話だと推測できよう。また、例(10)の「四方」という言葉を知らなくても、「海に囲まれている」という説明から、日本の地形・地理を思い浮かべるであろう。例(11)であるが、「かたずを飲んで」という表現を習ったことがなくても、緊張して試合を見るという日常の生活場面から情景は推測できるだろう。

3.2 文の推測

(1) 文脈による文の意味推測

例(12) テレビでスポーツコメンテーターが話しています。

プロのスポーツ選手は日頃からバランスのよい食事を意識し、なみなみならぬ努力とトレーニングを重ねることで、強くしなやかな肉体を手に入れています。中でもトップクラスの選手は肉体系に加え、「ここぞ」という緊迫した場面で平静を保つことができる強さをもっています。観客がかたずを飲んで見守るような場面でも動じることなく本来の力が発揮できる内面の強さ、試合で良い結果を出すにはこの点に特化したトレーニングが不可欠です。これは試合の結果を大きく左右する要素だと言えるでしょう。

(2016年7月問題3問2)

この(12)の例で「「ここぞ」という緊迫した場面」という文を聞き漏らした場合、または理解できなかった場合、どのように補完するか。前後の「肉体系に加え、・・・強さをもっています」という文脈から、聞き取れなかった部分は「精神的強さ」のことだろうと判断できよう。また、後続の文脈での「動じることなく本来の力が発揮できる内面の強さ」によって「大事な場面でも動じない強さ」という意味を押し量ることも可能であろう。

(2) 背景知識による文の意味推測

例(13) ラジオで男の人が話しています。

希少価値の高い金属は希少金属と言いますが、現

在新たな鉱山開発に頼らず、希少金属を確保する方法が模索されています。その中でも、特に注目されているのが、破棄された携帯電話などから回収する方法です。・・・電子機器からの再利用はコストが非常に高いのですが、天然資源には限りがあるわけで、積極的にこうした取り組みを進めていくべきだと思います。

(2013年12月問題3問5)

指示表現「こうした」の曖昧性、複数の意味を持ち、中国語の意味に定着しにくい名詞「取り組み」の抽象性が理解に困難をもたらしているのではないかと考えるが、それまでの文脈、そして背景知識から「こうした取り組み」は「電子機器からの希少金属の回収」であることがわかり、ひいては「電子機器の回収は希少金属確保の大事な手段だ」という文の主旨推量が可能になる。

こうした推測ストラテジーの練習法として、横山(2008)は、聴解テキストの一部を空白にし、声が消えている部分を学習者に推測させる「声のクローズ」という教室活動を紹介している。初級の聴解授業から意識的に「推測のストラテジー」を導入することで、聞き漏らしや未知語に動揺することなく、既有知識や文脈を積極的に用いて内容を補完する習慣を身につけさせることは、聴解問題への取り組みとしては極めて有用だと思われる。

4. まとめと今後の課題

本稿では、まず文章構造および主題文の把握を聴解のストラテジーとして取り上げた。主題文は、文の大意理解に資する重要なファクターである。読解文と異なり、過ぎ去った内容も先の内容も見えない音声問題において、「主題文」の予知、判断のヒントになると思い、文章構造を取り上げてみた。

「序論—本論—結論」という構造や「逆接」の構造が多いことから、主題文の多くは、「文尾」と「文中」にあると判明した。「並列」や「添加」の文章展開なら「文中に散在する」か「存在しない」場合もある。主題文が存在しない場合や、聞き漏らした場合は、発話者の表現意図をサポートする具体例、補充、説明、解釈の部分、繰り返して現れる単語、類義語などが大意理解のヒントをもたらす手がかりとなる。

一方、主題文の識別で言語的には「逆接、因果、換言」などを表す接続詞、「態度、判断、助言、願望」など

のモダリティーを表す文末表現を聞き逃さないことである。また、「願望、意見」を表す動詞などと共起することも知っておくべきである。

聴解には、読解問題のように再チェックができないという本質的な問題がつきまとう。発話を聞きながらのリアルタイムでの主題文捕捉には、かなりの習熟を要するので、日頃の読解、聴解、作文などの授業で、文と文の繋がりだけでなく、文章全体の枠組みに馴染んでもらうことも必要ではないかと考える。

「予測」の方法として本稿では、「発話者の社会的身分」を手がかりに話し手の発言意図を捉える試みを提示した。たとえば、大学の学長や先生、アナウンサー、専門家などは、それぞれにその社会的身分や立場に即した内容での発話であることが通常であるので、発話者の社会的身分と話題がわかれば、大まかであれ発話の方向や大意を予測することはできるであろう。

次に「推測」のストラテジーであるが、これは断片的に聞き取った単語や文から、聞き取れなかったり理解できなかったりした単語と文を推測する方法である。その際に重要になるのは、文脈から推測する能力と学習者自身に蓄積された背景知識である。

「予測」であれ「推測」であれ日本に関する背景知識の量と質をまずは充実させるということが前提にならざるを得ない。いかに背景知識を増やして連想力を伸ばすのか。歴史、地理環境、政治、経済状況、風習、文化、教育現状などの背景知識を学習内容の不可欠な部分として、ドラマ、映画、アニメ、読書などを通じて日本社会のあり方を普段から把握する努力が必要であろう。

聴解における短文の大意理解は、読解と違い、目に見えない音声内容をリアルタイムにまとめるという難しい局面がつきまとう。その困難を乗り越えるために、文章構造に馴染み、主題文の特徴に心を配り、既知情報によって未知情報や聞き漏らしを予測したり、推測したり、言語知識と非言語知識をともにフル動員することが求められるのである。

本稿では、N1聴解問題を例に短文の大意理解のストラテジーを考察したが、その過程でこうしたストラテジーの有用性の実証確認、およびN1に限らず普段の授業における独話聞き取り学習法のさらなる検討が必要であることを痛感した。今後は、文章構造の把握方法を中心に論を深めたい。

注

- ① 独立行政法人国際交流基金, 財団法人日本国際教育支援協会 『新しい「日本語能力試験」ガイドブック』[OL] 2009
<http://www.jlpt.jp/reference/materials.html?mode=pc>.
- ② 本稿では, 2010年7月-2016年6月のN1聴解「概要理解」問題における独話聞き取りの文章構造と内容を考察した結果から, 文のつながり方を大まかに「順接, 逆接, 添加, 並列」に分けることにした.
- ③ 佐久間(1987)は, 段落をまとめる文を「中心文」と言い, 「中心文の最も強い統括力を持つ文で文章全体の統一性と完結性を表現する文」を「主題文」としている.

- (4)佐久間(2000)『日本語の文章・談話における「段」の構造と機能』平成9年度11年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書早稲田大学日本語教育センター
- (5)蒔田雅子(2014)「聴解ストラテジー使用と手がかり—日本語母語話者, 上級学習者, 中級学習者の分析から—」『音声研究』第18巻第1号, pp.1-12
- (6)水田澄子(1996)「独話聞き取りにみられる問題処理のストラテジー」『世界の日本語教育』6号, pp.49-64
- (7)横山淳子(2008)『国際交流基金日本語教授法シリーズ5 聞くことを教える』ひつじ書房
- (8)杜 艶(2009)「聴解授業における推測ストラテジー指導の試み—「声のクローズ」の活動を通して—」『日本言語文化研究会論集』2009年第5号
- (9)範海翔(2012)「日本語の接続表現と中国語の連詞の類型に関する比較」『言語の普遍性と個性』第3号, pp.65-73
- (10)夏俊・新田小雨子(2018)「N1阅读理解部分观点主旨題的对策」『日语教育与日本学』第12辑, pp.65-76

参考文献

- (1)市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- (2)佐久間 (1986)「論説文の文章・文段構造と要約文の類型について」『日本語論集』2号, 筑波大学留学生教育センター, pp.1-29
- (3)佐久間(1987)『「文段」認定の一基準(I)—提題表現の統括—』『文藝言語研究言語編』11筑波大学文芸・言語学系, pp.89-135

Received date 2018年11月29日

Accepted date 2018年12月26日

付表 N1 聴解「概要理解」問題の場面, 発話者及び話題のまとめ

場面	発話者	分野	話題
学校	先生	社会	人口増加が招く問題, 会話の仕方は社会によって異なるものだ, ある国の今後の経済政策
		科学	生活に役立つ科学技術, 浸水被害の原因と対策, 木の葉が色づく仕組み, リネンの使われ方
		文学	小説に描かれている時代の背景
	学長		卒業生に思いやりの心を持ってほしい
	就職係		日本企業が留学生に望むこと
会社	社長		新たに展開する海外事業, さまざまな経験をつんでほしい
	社員		野菜を作る社員の募集, 飲食専門の会社の業務委託 販売システムで問題が起きたこと 店舗の新設には賛成するが値上げには反対,

テレビ ラジオ	女優 選手		女優になったきっかけ 引退を決意した経緯	
	部長 社長		昔からの味を大切にする, 消費者の行動を観察することの大切さ	
	アナウンサー レポーター	教育 農業 経営 伝統 生活	家計に占める幼児の教育費の増加・進学する人が増えている理由・留学する日本人学生が減っている原因 農家の作業にヤギを活用している例 商店街に客を呼ぶ取り組み, ある書店の販売戦略 伝統芸能の継承, 雷が発生した場合の対処法	
	専門家		子供の虫歯の予防法, 有給休暇の取得率をあげる政府の取り組み, コーヒーの効果, シイタケの育て方, 現在の労働のあり方を改善すべき	
	作家		人々の生活に触れた方がいい	
	コメンテーター		精神力を養う重要性, 国立公園についての規制の再考, 新しいパソコンはデザインは良いが値段は適当でない	
	男性 女性	社会		言葉の地域差, 商品が急に売り出した理由, 音楽と客の行動の関係, 希少金属のリサイクル, 清掃ボランティアの参加, 青少年犯罪への対応
		経済 経営		ある園芸店の新たな取り組み, イカを飼育する水族館が少ない理由, 在宅勤務について会社が留意すべきこと, 魚の消費量を増やす工夫
		動物		動物の睡眠のとり方, 猫が出す喉の音
		農業		農業を始めた理由
文化			着物の染みを取る伝統的な方法	
その他		結果を出すためには地道な努力が大切, 何をやるにも行き過ぎないことが大切だ, ある防災用ヘルメットの特徴		
講演会 セミナー	専門家 農家 男性 女性	文化	和紙の魅力, 祭りの存続にかかわる問題点	
		農業	農業の後継者が減少している理由	
		その他	声を持つ情報の大切さ, 分析結果の提示方法の重要性	
留守番	男性・女性		約束の変更, 商品の数の確認	
店	店員		掃除機の性能	
駅前	市議会議員		大きい公園を作ること	
社会活動	グループの 会長		ボランティアグループの歴史	